

ISPW 初体験の記

— 6th ISPW 報告 —

玉井哲雄
(筑波大学)

1. はじめに

第6回国際ソフトウェアプロセス・ワークショップ(6th ISPW)に参加した。場所は、函館の北、大沼国定公園のほとりのプリンス・コテージ。期間は10月29-31日である。

このワークショップは、今回初めて日本で開かれた。といっても、筆者はこれまでのワークショップに参加したことがなく、過去の開催と今回とを比べることはできない。米国メイン州で開かれた前回については、SEAMAIL, Vol.5, No.1-2, に岸田、中川、中島、各氏の大変おもしろい報告がある。その中で、岸田さんはそれ以前の開催についても、自身の参加経験を基に触れられているので、参照されたい。

白状すれば、今回参加したといっても実はポジション・ペーパーを出していない。だから、正式な参加メンバーとは言えない。そもそも、ソフトウェア・プロセスという概念に、つい最近までそれほど注目してはいなかった。昨年京都で第1回が、今年コロラド州ボルダーで第2回が開かれた"未来のソフトウェア環境国際シンポジウム(ISFSE)"に、続けて参加する機会を得た。そのシンポジウムの核となるメンバーがISPWとほぼ同じであり、内容もかなり共通することから、"プロセス屋社会(process community)"に新顔として出入りを許されるようになり(もちろん、この"社会"のかなりの人々、とくに日本のメンバーとはずいぶん前から顔なじみではあったが)、あまつさえ次の第7回ISPWの組織委員会に入ってほしいと誘われた。深く考えもせずに引き受けてしまったが、すでにかんりの歴史のあるワークショップに、一度も出ていないで委員をやるというのは余りに無謀だ。そこであわてて日本で開かれる今回に、ポジション・ペーパーの締切はとっくに過ぎ、セッション・プログラムまで確定した段階で、何とか主催者をお願いしてオブザーバとして出させていただいたものだ。

2. ワークショップの構成

6ISPWの組織委員長は片山卓也(東工大)、委員はG.Kaiser(Columbia Univ.)、岸田孝一(SRA)、落水浩一郎(静岡大)、W.Riddle(rMISE)、J.Wileden(Univ. Mass. ただしワークショップには欠席)。参加者は約40名、内海外から30名、日本から10名という割合である。海外は米国とヨーロッパで、米国20名、ヨーロッパ10名といったところ。日米欧が、1対2対1ときれいな比になったのは、多分に人為的なものであろう。実際、20ぐらいのペーパーを落とさざるを得なかったということだが、同じプロジェクトからの複数申込は1つに絞るなど配慮があったらしい。

日本で開かれた催しにしては日本の参加者比率が少ないが、このワークショップの運営に継続性があり安定していることの証拠と言える。むしろ、海外から多くの参加者のあったことを喜ぶべきであろう。また、ヨーロッパからの参加が比較的多いことも目につく。Espritプロジェクトに代表されるように、ヨーロッパでこのところソフトウェアを対象とする大型プロジェクトが盛んで、その成果が出始めているようだ。それに、W.Schafer(Univ. Dortmund)も言っていたが、いまやヨーロッパと日本との間の時間距離は案外短いのだ。

3日間で6セッションが組まれた。各セッションは、まずまとめ役の人が15分ほど口火となる話をし、あとは自由討論をするという形態である。この形は、第4回以降定着したそうだ。討論中心と言うのは、人数を絞ったワークショップならではのスタイルで大いに意義があるが、なかなか大変なものでもある。とくに、新入り、

英語を母国語としないもの、控え目な性格のもの、議論をすることの訓練を受けていないもの、生活文化背景を共有することを前提とした人間関係を作ることには慣らされているもの、などにとっては、議論を追うことはできても議論に参加することは難しい。筆者は上の条件がすべて成立する上に、オブザーバという立場で発言権があるのかどうかも怪しい。しかし、まったく黙っているのもつまらないので、少しはしゃべったが。

それだけではない。議論は、往々にして抽象論に走る。空高く舞い上がる。そうなると、発言者も、いわゆるISPW マフィア（岸田さんの文中に出てくる言葉）に限られてしまう。前回のメインでは、中川さん、中島さんの報告にもあるようにこれが甚だしかったらしく、その反省から今回とられた対策もある。一つは、片山先生の提案で、プロセス記述の共通問題を作って各自記述実験をし、その結果を基に具体的な議論をしようというものである。M.Kellner(SEI) が苦心して作った問題に対し、19の解答例が集まっていた。解答の比較検討会はワークショップ開催前の27日に東京で開かれたそうであるが、本ワークショップの中でもその結果が活かされる予定であった。

もう一つは、議論の交通整理役を置いたことで、この“おまわりさん”がかなりの権威で割り込みや勝手な発言を抑え、基本的には挙手順に発言者を指名する建前である。これは、ある程度機能した。

3. セッションの進行

各セッションについて細かく報告していったら長いものになりそうだし、大体それができるほどノートもとっておらず、記憶力も減退している。以下、およその流れを思いつくままに記す。全体のよいまとめは、最後のセッションでI.Thomas(HP)が見事にやってみせた。いずれ、ワークショップ・レポートとしてでる予定なので、関心がありしかも辛抱強い読者は（というのも、出るのが大分先になることは確かなため、前回のものがいまだにできていない）、それを読まれるのが一番よい。なお、ここまで日本人だけに敬称をつけてきたが、考えてみるとそれもおかしなものだ。思い切って、すべて敬称抜きの姓だけで済ますことにしよう。関係者には、ご容赦をお願いします。

最初のセッションは、プロセスモデリングの概念というテーマである。まず、熊谷（富士通）が基調報告をした。面白かったのは、プロセスを外部から観察して分析する場合と、内部にいて見る場合とでは様相が異なるという指摘で、これを比喩的に叙事詩と叙情詩との違いになぞらえた。これは十分に刺激的な発言だったが、残念ながらその後の議論の展開はこの方向には進まなかった。Balzerがソフトウェアプロセスの特徴のリストアップという、はるかに散文的で、片山が指摘したようにこのワークショップでもすでに繰り返し議論してきている論点を出してきたら、議論はほとんどそちらの方へ行ってしまった。

2番目のセッションが、先に述べた共通問題の結果報告で、KellnerとRombach(Univ. Maryland)が担当した。しかし、せっかく豊富で具体的な材料がありながら、議論がそれを活かす方に進まなかったため、不満の声が出た。そこで動議がだされ、以降のセッション予定を、この共通問題の成果を取り込む形に変更することが求められた。動議は通り、それに基づくプログラムの変更の仕方については委員会一任となった。その夜、委員達が協議した結果、セッション構成は変えずに、翌日の午前アーキテクチャのセッションで、いくつかの記述例をアーキテクチャの観点から紹介してもらうこととなった。

結果的にはこの措置が、またまた波乱を招くもととなった。30日午前の第3セッションは、ソフトウェア開発環境のアーキテクチャというもので、まず落水が関連するポジションペーパーをとりまとめながら、要領をえた基調報告を行った。それから共通問題の解答記述の紹介という趣旨で、当初3件の発表が予定されていたが、それなら自分も話したいという申し出が2件あったらしく、都合5件の発表が行われることになった。しかし、時間の制約からすると5件は多すぎたのであろう。それぞれの発表が、この際自分達の仕事をよく伝えようと長くなりがちに加えて、さまざまな質疑、討論がされるから、最後の1人がはみでてしまった。それが、たまた

ま隣に座っていたイタリア人の Ambriora(Univ. Pisa) である。彼はすでに事態がそうなる以前から、それまでの発表があまりアーキテクチャと関係がないこと(これは確かにそうだったが、同時にアーキテクチャとして想定しているものが、人それぞれでずいぶん違っていたことも確か)、また会議がどうしても米国人主導で行われること、に不満感を抱いていた様子で、午前中に自分の発表ができないことがわかると、かなり感情をあらわにして文句を言った。筆者は隣同士というよしみからも同情したが、後でもともと彼の発表はいわば飛び入りであったことを知り、その同情の気持ちもやや後退した。

この件には、実は発表中心か議論中心かという運営の基本方針の問題もからんでいる。すでに書いたように、このワークショップでは当初発表中心にやってきて、それへの反省から議論中心を基本方針とするという意味決定が、核メンバー達によってなされた。その連中にとっては、1セッションに5件の発表があること自体が方針に抵触し、まして発表できないと文句をいうことはおかしいということらしい。確かに、テーマからはずれたり、自分の研究の宣伝のような発表が長々と続くことは問題である。しかし、ある程度は準備された発表がプログラムに組まれていた方が、議論もいたづらに哲学的にならず、効果的なのではないかと思う。実際、筆者には、多くの問題があったにも関わらず、このセッションの方が前日のよりも面白かった。

件の Ambriora の発表は、とにかく繰り下げて午後に行われた。その後、午後の本来のセッションテーマである"オブジェクト管理システムとメカニズム"について、Kaiser が例によって早口で基調報告をした。これもなかなかよく練られたまとめだったが、途中で議論が入るので、このセッションはほとんどそれだけで終わってしまった。Kaiser は、発表するときはものすごい勢いでまくしたてるが、自由討論の時はほとんど発言せず、見かけによらず控えめな印象を受けた。このワークショップに限っては、相対的に女性の発言が少なかった。もっとも、Penedo(TRW) は別である。問題は、性別による違いというよりは、年期とか場数とか権威とかの違いによるものかも知れない。しかし、日本はそもそも女性の参加者もいないのだから、それ以前である。

最終日 31 日の午前は、チーム作業をテーマとするセッションだった。まず、D.Perry(AT&T) がなにかしゃべったはずだが、まったく覚えていない。ただし、Perry はこの会議を通じて活発に発言し、独特のユーモアでなごやかな雰囲気作りにも大いに貢献していたことを記しておく。続いて、岸田がいつもながら聞きどころのある発表を行った。組織、プロジェクト、グループ、個人、というレベルでプロセスを考えたとき、上位から降りてくるゴールは、個人レベルのゴールと通常相入れない。逆に、下のゴールを上位へ昇華させる仕組みを考える必要がある、というもの。孔子と老子の政治思想の対比を比喻として出すところがにくい。

その後の議論は、不活発だった。チームや共同作業の問題、人間間のコミュニケーションの問題、認知プロセスといったテーマでは、少なくともここに集まった人達の中に、それほど成果をあげているものがないということだろう。中では、プロセスの成熟度の評価というユニークな視点で実証的な成果を出している Humphrey(SEI) の発言がもっとも迫力があつたが、それでも議論全体の流れを作り出すまでにはいたらず、単発的な印象だった。

午後のまとめのセッションは、すでに述べたように Thomas が要領のよいまとめをした。Thomas の話の手際がよかったためというより、最終日の午後で皆の疲れがたせいで、ここでもあまり議論は盛り上がりなかつた(誰かが、"金曜日"の午後の昼食の後はこんなものさといった。実は水曜なのだが、気持ちが出ている)。

4. 感想

初参加の自分としては、ソフトウェアプロセスの研究状況を手っとり早くつかめたという意味でもよかったが、全体になかなか楽しめた。セッション以外でも多くの人達と話す機会の多いことが、こういう集中的な会議のいいところだろう。

それに何より場所と季節がすばらしく、しかも期間中見事な晴天続きで、例年より遅いという見頃の紅葉をひ

きたたせた。池を眺望するホテルの露天風呂はよい設計で、とくに海外からの女性参加者に好評だった。Balzer がコウイチ（岸田）は、こういう設営にかけてはお手のものだと言っていたが、運営をされた方々に感謝したい。

会議を通して印象に残ることの一つに、process community という言葉が実に頻繁に出てきたことがある。冒頭でこれをプロセス屋社会と訳してみたが、プロセス派、プロセス（学）界などというより、縄張り意識がさらに働いているような気がする。しかし、これは日本人である自分が、ヤクザの世界や、自民党の派閥、役所や会社のセクショナリズムに、引きつけて解釈しすぎているのかも知れない。たとえばどんな文脈で使われるかと言うと、チーム活動に関する議論が盛り上がり欠けた際、CSCW の方の動きはどうかという質問に対し、CSCW のコミュニティも最近沈滞気味で、むしろわれわれプロセス・コミュニティの方に期待しているらしい、などという発言が出てくる。Kaiser はデータベース・コミュニティでも活躍しているようで、そことプロセス・コミュニティとの違いなども話題に出た（Kaiser の話は、どちらかと言うと技術的な違いについてはあったが）、人が集まり組織ができれば、何らかの政治が内部でも外部に対しても生まれることは当然である。ソフトウェア開発という場面に限定はしているが、人の営みとしてのプロセスを研究対象としているグループが、そのグループとしての活動プロセスについては、方法的ではなく、他のあらゆる集団的人間活動と同じように動いていることがおもしろい。

5. 第7回の ISPW

今回は、Ian Thomas を委員長として 1991 年 10 月 16-18 日に、サンフランシスコの北、ワイナリーで有名な Napa で行われる予定である。フランス育ちのイギリス人でワイン通の Thomas らしい、場所の選定である。会議上として予定している場所の近くに大変いいフランス料理店があるので、晩餐会をそこでやると言っていた。^{エモ}

最初のプログラム委員会を、このワークショップ期間中に開いた。ポジションペーパーの評価の方法、セッションの運営方法、とくに準備された発表をいくつか行わせるかどうか、などについて議論した。

ポジションペーパーの締切は、1991 年 3 月 31 日である。日本からもまた、多くの参加があることを期待したい。極上のワインが待っています。